

ART KISS

Contemporary Art Museum, Kumamoto

LETTER

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

学芸員
実習生
特別取材号
vol.20

2005.3.15 熊本市現代美術館発行



[アート・ド・ギャン]
ART DE GYAN

もちろん、どのおもてなしも「アート」がテーマです。

画廊喫茶三点鐘

熊本市千歳本町3・8有明ビル ☎326・3040

●「天然記念物水前寺ノリ発祥地を守る色紙チャリティー展」(8.1-8.7) 今回で四回目となる三点鐘企画の色紙チャリティー展は、「熊本の水を考える」という趣旨で、県内在住の画家30名の作品が展示されていた。皆が一つのテーマを持ちつつも、各々が自由な題材を描いており、中でも坂田黎一さんが描いた江津湖の水彩画は、水面に映る緑の木々の美しさと遠かに映る会峰山が印象に残る作品だった。(上野・江頭)



坂田黎一さんの作品

熊本伝統工芸館

熊本市千歳城町3・35 ☎324・4930

●「春夏秋冬押し花展」(8.3-8.8) 展示会のタイトルどおり、四季の花を使用した季節感豊かな押し花展。竹元悦さんをはじめとする7名の作品約35点が展示されており、それぞれの個性をいかした作品が並んでいる。押し花といっても野菜を使用した作品や、華を使用して様々な風景を表した作品など、面白い発見がたくさん詰まった展示となっている。竹元さんにお話を伺ったところ、「最近ではスーパーや花屋へ行っても、季節に関係なく様々な草が手に入るようになった。そんななか今回の押し花展では、それぞれの季節の旬の花や野菜を使用して作品を作った。作品を見てくださった方には、日本の四季の美しさというものを感じてもらえたらいいと思う」とのこと。会場では押し花作成体験(紙押し花体験)も出来るうえ、展示室が和室のため、畳の上でゆっくりと作品を鑑賞することも出来た。(藤田)



金子理恵さんの作品
《花の魅力を伝える四季押し「あ、年輪のひととき」》

●「陶芸家 兄弟二人展」(8.3-8.8) 津全日人詩さん・日人夢さん兄弟による展示。今回「焼メ(やさしめ)」という箱を使わず、火と土の加減だけで表現する技法で、日人夢さんは、荒々しさ、ダイナミックさを表現するため「カド」にこだわりを見せる。弟日人詩さんは青磁による独特の「アオ」にこだわりを見せている。焼メの壮大な美しさ、青磁の涼とした美しさ。どちらも確立した存在感を見せつつも、花瓶や食器と言った本来の役割を離れた時、異なる芸術の美を生み出している。陶芸の世界が、手を広げて迎えてくれるような展示だ。可能な限り、物年間かかれているとのことである。(中尾)



日人夢さん・日人詩さん
《焼メ(やさしめ)》

●「大川木彫工芸展同時開催現代和家具民芸家具展」(8.3-8.8) 木製の家具を中心とした展示で、手作りの木製食器や花瓶、手鏡なども展示されていた。大川家具ならではの、熊本にはない技術、素材が見どころだそう。ふくろうや虎などの彫刻は精巧な出来栄であり、木製のついでにガラスなどをはめ込んであるものも印象的であった。柔らかな曲線や展示会場全体に広がる落ち着いた木の香りが、木製家具の魅力を十分に物語っていた。(坂本)



《現代和家具民芸家具展》展示風景

アートルーム イケオ

熊本市新市街6・6 ☎324・1414

●「PHOTO EXHIBITION-Sojo University Photograph club 夏季展」(8.4-8.9) 崇城大学写真部が毎年開催しているグループ展。今年は総勢13名による24点の作品が展示されている。作品は白黒写真が中心となっており、各役員が思い思いに撮った人物や風景など幅広い内容となっていた。南賢哉さんの《格言》をはじめ、白い空間に広がる白黒写真の強いコントラストが印象的で、会場全体が静かな力強さに包まれていた。今後はカラー写真の展示なども考えているとのこと。来年も楽しみにである。(矢加部・西野)



南賢哉さんの作品《格言》

熊本県立美術館本館・分館

熊本市二の丸 ☎352・2111 (本館)

熊本市千歳城町2・18 ☎351・8411 (分館)

●「銘板会作品展」(8.3-8.8) 女性的といえよいだろつか、明るさ、柔らかさに満ちた作品が並ぶ。染色や詩集、絵画、水墨画やビストロ4まで120点以上の多彩な作品群は、自衛短期大学同窓会(銘板会)が同短大の50周年を記念して集められた。卒業生によるアットホームな雰囲気の中でゆっくり作品を楽しむことができる。

今回印象的だった作品のひとつに、下川玲子さんの《染色 華の宴》がある。木綿の布に淡い色の花々を描いたこの作品は、自然の草花を占領とする草木染と絹を使ったロウケツ染めの手法で制作された。美しい花々や葉の生き生きとした様子が優しい雰囲気と合わせ、ほっとさせてくれる作品だ。(稲田・佐野)



下川玲子さん《染色 華の宴》

ジェイ

熊本市大江本町6・9 (味噌天神電停前) ☎372・8732

●「平木安弘個展・イラストと創作フィギュア」(8.2 - 8.10) イラストや紙粘土を素材としたフィギュア各20点前後を集めた平木安弘さんの初個展。平木さんは広告のイラストを手がけながら、6年前からフィギュア制作を始めた。今回の個展では全体的にユーモアあふれる作品が多く、意外性を感じさせるイラストや臨にまでこだわって作ったフィギュアには作者の大切にしている遊びの精神が表れている。《扇崎台・夏》では野球選手と熱帯魚。《夏酒》では浮世絵の美人と加ビールが描かれているなど、じっくり見ていると面白い。(小三・高尾)



平木安弘さんの自作フィギュア



平木安弘さん(右)と作品(左)



平木安弘個展「イラストと創作フィギュア」の展示の全さん。熱帯魚、タイ・ハービー

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反燈町5・13 茗茶ビル1F ☎343・9664

●「第11回真美会有志展 - 2004 -」(8.1 - 8.10) 毎年行われている真美会有志の18点の油絵の展示。故・谷田起敬さんの「絵から色が見えるのではなく、色から絵が見える」という教えのもと、やわらかくやさしいタッチで身近なものを題材とした作品が多い。北里剛さんの《グラジオラス》は、彼の良さんが活けた花の美しさに魅かれて描いた、日常のやさしさを溢れる作品である。ふらっと立ち寄り冷たいものでも飲みながら、のんびりと絵を楽しめる空間であった。(植田・満田)



北里剛さんと作品(右)のグラジオラス

くまもと阪神 美術画廊

熊本市桜町3・22 ☎322・1111

●「味府礼子・星野久美 陶二人展」(8.3 - 8.9) 熊本で開業した味府礼子さんと星野久美さんの二人展。茶碗や皿など普段使いの食器も並ぶ。味府さんの《無題》は、盛り皿としても、ひっくり返して、置物としても利用できる。その作品を持つひとが自由に使い道を決められるよう、味府さんの作品はほとんどが「無題」なのだそう。また、一日中制作のことを考えているという星野さんは、日常の感動を作品を通して表現。洗練されたフォルムからは、絵画的美しさとともに作者のまなざしの真実さが感じられた。(村上・北川)

平成16年7月26日～8月8日(12日間)の学芸員実習のカリキュラムとして、市内ギャラリーの展示評論に初挑戦しました実習生を紹介いたします。

上野華代さん(京都女子大学)
佐野友紀さん(西南学院大学)
稲田大貴さん(西南学院大学)
矢加部咲さん(大阪芸術大学)
江頭満里子さん(佐賀大学)
坂本明日香さん(熊本大学)
中尾あやさん(熊本大学)
鎌田知花さん(熊本大学)
高尾摩耶さん(熊本大学)
福田佳奈子さん(熊本大学)
小玉真梨子さん(崇城大学)
満田恭子さん(崇城大学)
村上明日香さん(崇城大学)



こども芸術大学・アートキャンパス@金峰山百年の家(7/29・30)での記念撮影

横尾忠則 TADANORI YOKOO

熊本・ブエノスアイレス化計画展 開催中！（～4月17日）

この展覧会は熊本市現代美術館の開館前に、イベントとして開催した講演会のために横尾忠則さんが来熊し、熊本の印象をお尋ねした際に、即座に「ブエノスアイレスのようだね」と述べられたことに端を発しています。熊本に足を踏み入れた時に、地球の裏側から横尾さんを貫いた靈感を、そしてそのような靈感に導かれて制作された素晴らしい横尾芸術の数々を、存分に楽しんでいただくというプロジェクトです。



《結核武路 64の風景》2001年



《踊るデュシャン、深く漱石》制作風景、2004年

今月の展覧会

●ロンドン テート・モダン「ヨゼフ・ボイス展」(~5.2)

●パリ ポンピドーセンター「DIONYSIAC展」(~5.9)

●福岡アジア美術館 「アニメイト。展」(~3.29)
1092-263-1100

●福岡県立美術館 「違和感を飛び越える術！—藤浩志展」(~4.3)
1092-715-3511

●三笠地所アルティウム 「山本恭展」(3.16~4.17)
1092-733-2050

●鹿児島市立美術館 「所蔵作品にみる こども展」(~3.27)
1090-224-3400

●高松市現代美術館 「野口彌太郎の墨絵」(~4.24)
1095-824-8200

個人作品展 (3.29~4.6) 「個人二展展 渡辺誠展」◎

編集後記

今回のアートキッスレターは平成16年度の学芸員実習生による取材を中心にした特集号です。美術はそれを見る人間、つまり鑑賞者がいて初めてその姿を表し始めます。作品に対する感想がいかなる言葉で表現されるのか、作品と感想がひとつのハーモニーを生み出すときに、作者本人も気づかなかったその作品の力が引き出されることとなります。さて、実習生のその若い感性にさまざまな作品はどう映ったのでしょうか。その言葉ひとつひとつに注目していただき、この特別号をお楽しみください。

(文中) ...

南真 宏

発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.20 2005年3月15日発行 ◎無料◎

編集人/南真 宏

担当/富澤 治子

印刷/コロニー印刷 デザイン/松永 社デザイン事務所

発行/熊本県現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3

TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7894 <http://www.camkar.jp>

上海ビエンナーレ 2004 (2004.9.29-11.8)

5回目となる今回は、「テクニクス・オブ・ヴィジブル
影像生存」というテーマのもと開催されました。
印象に残ったのは、ヤンチュワン・カントリー・ペー
パーカット・リサーチ・プロジェクトによる《長征工程—
延川県剪纸大普查》ですが、これは1万4千人が切り紙作
品制作に参加した大プロジェクトで、伝統美術と現代美
術をつなぎあわせ、また、プロジェクトに参加した1万4
千人と展示室内の鑑賞者13万人との、作品を通してのダ
イナミックな交流の場を提供していました。



ヤンチュワン・カントリー・ペーパーカット・リサーチ・プロジェクト
《長征工程—延川県剪纸大普查》(2004)

金沢 21世紀美術館開館記念展 21世紀の出会い—共鳴、ここ・から (~3.21)

昨年10月に開館した金沢21世紀美術館の開館記念展。17方面から招いた約40人の
現代美術家の作品を紹介。SANAA(妹島和世・西沢立衛)が設計を手がけ、ヘネチ
アビエンナーレ国際建築展で金獅子賞を受賞したこの美術館は、開放感のある円
形のガラス張り。その中に円形、矩形とりまけた大小の展示室が入っています。
それぞれの作品はチーフ・キュレーター長谷川祐子の「芸術とは感性を呼び覚まし、
心をリフレッシュさせてくれるもの」との言葉どおり、新鮮な感覚を覚えさせる
ものばかりでした。特に印象に残ったのは、ゲルダ・シュタイナー&ユング・レ
ンツリンガーの《ブレインフォレスト》。木の枝や葉がからまる広大な空間に、
市民が作成した小さなオブジェや、造花などが付着しているインスタレーション。
神経が走る脳のメタファーは、文化、世界の広がりとともに人間の内的な広がり
も感じさせるものでした。



ゲルダ・シュタイナー&ユング・レンツリンガー
《ブレインフォレスト》2004

台北ビエンナーレ (2004.10.23-2005.1.23) 台湾／台北市立美術館

ブリュッセル出身のBarbara Vanderindenと台湾出身のAmy Chengの二人のキュレ
ーターによる企画で、「Do you believe in Reality?」のタイトルのもと、32組のアー
ティストが参加しました。特に印象深かったのは、Chen Chieh-jen (陳界仁)の《The
Factory》(2003年、16mmフィルム)で、現在は閉鎖された縫製工場の前従業員を撮
影した映像作品で、白黒の歴史記録映画のように、歴史が流れ、失われていくもの
への憂鬱と静かな別れが表現されていました。ビエンナーレ全体においては、多彩
なテーマや表現手段の作品を通して、現代の私たちの認識の根拠とは何かを再確認
させるものでした。

金門芸術館—18の個展 (2004.9.11 - 2005.1.10) 台湾／金門島

台湾と中国の冷戦最前線にあった金門島に残された2000基のトーチカ。このか
つでの軍事基地を文化発信地へと変容させる試みとして開催されたこの展覧会は、孫
國強が総合ディレクターをつとめ、18組の中国、台湾出身アーティストが参加し
ました。アーティストそして建築家でもあるChang Yongho (張永和)の《One
Divided by Two》は、かつての要塞を二分割し、半分は取り壊し、その影を暗示さ
せる空間へ変容させ、現在の私たちの立地点を強く認識させるものでした。
各地区に展示された作品は、いずれも、かつて中国大陸へ向けていた対立の根差し、
その解放を意図させるもので、静かな島に刻まれた歴史を伝えていく確かな一歩
であると感じました。



Chang Yongho (張永和) 《One Divided by Two》(2004)